

しが国際協力親善大使レポート

かつら たけくに
桂 武邦さん

隊次：2015年度2次隊

職種：理科教育

派遣国：エチオピア

自己紹介

私は滋賀県野洲市で生まれ、篠原小学校、野洲北中学校、石山高等学校と高校生まで滋賀で育ちました。高校生のときに、自然の謎を紐解く理科、特に未知の世界が広がる天文の分野に興味を持ち、大学は神戸大学地球惑星科学科に進学しました。大学生時代に、夢を持つ教育の力に関心が芽生え、いつか世界中の子どもたちが夢を語れるような社会に向けて貢献したいと思うようになりました。

大学院卒業後は大阪の公益財団法人に就職し、キャンプ場で小学生に対してのキャンプを企画・運営したり、バスケットボールやサッカーの指導を行ったりしました。働く中でやはり直接世界の子どもたちと関わりたい、世界の教育事情を肌で感じたいという想いが強くなり、就職先を退職させていただき、青年海外協力隊に応募させていただきました。

エチオピアの気候や文化の紹介

エチオピアは赤道に近いですが、活動先は標高が2000m以上もあるため、気温が10~30℃で乾季は湿度も少なく、とても気持ちの良い気候の中生活しています。またエチオピアは独特の歴、時間感覚を持っており、2016年が2008年であったり、1年が13月までであったり、朝の6時が0時であったりと慣れるまでは少し混乱してしまいます。私が配属されている首都は中国をはじめとした各国の技術移転が進んでおり、街には鉄道が走り、ビルの建設ラッシュ真っ只中です。広がる大草原と動物たちのイメージとは異なり、周りに緑が見当たりません。

活動や生活について

配属先からの要請は、学校に理科実験を定着させるということでした。実際に活動を始めてみると確かに実験の重要性は認識していても、器具がないということで実験をしない、また実験をしても先生が前で生徒に見せるだけで終わる、ということが多くあります。そこで今は理科の先生に営業に行き、教科書通りでなくても任地で手に入るものを使って実験できることを説明してとにかく授業に実験を取り入れる、また実験を行う際には、些細なことでも生徒を前に呼んで手伝ってもらい、危険でない試薬は実際に目で見て触って確かめさせることに重点を置いて活動しています。活動期間の2年間で器具の整備はもちろんのこ

と、筆記用具も揃え、仕組みを整え、生徒たち自身で実験ができる環境を作っていきたいと考えています。そして実験を通して世界に目を向け、将来の夢を熱く語れる生徒を増やすことが目標です。

私が持つエチオピア人に対する印象は、“なんしか距離が近い”というものです。もともと文化として人と人とのつながりを大事にしています。ですので、ご飯を食べているところに通りかかると(それが例え知らない人でも)、ほぼ確実に「イニブラ！(食べてけ!)」と誘われます。また手の中いっぱい包みこんだ料理を相手に食べさせ合う文化もあります。話すときの顔の距離も唾がよく飛んでくる距離ですし、男の人どうしても手をつなぎます。このようなエチオピアの人々は優しさにも溢れ、まさに日本の人情を感じさせます。活動初日から先生も生徒も壁を作らずに接してくれますし、校内を歩いているとあいさつの嵐やサッカーのお誘い、前述のイニブラ！のお誘い、そしてエチオピアダンスの急なご指導が始まり、歩くのも困難なくらいです。実験の授業をしているときもちょっとしたことで歓声が上がり、ときには真剣にときには笑顔で授業に取り組んでいます。ある日昼食を取っていると、1人の生徒にノートの端を千切って作った手紙を渡されました。中には“学校にお願いして、化学の実験で薬品から手を守る手袋を買ってもらってください。心配です。”などと書かれていました。備品が少ない中で実験をしている私を気遣ってくれた内容にとっても感動しました。

これからの活動の中で、教育事情や抱える問題を俯瞰的に捉えることも重要ですが、エチオピアが大事にしている人と人とのつながりをいつも忘れずに、日々関わる人々に寄り添って活動していきたいと思います。



活動先のテメンジャヤジプライマリースクール。右奥が校舎



Grade7, 8(日本の中学1, 2年生)の生徒たち



授業風景



Nation&National Ethnic day(80以上ある民族を尊ぶ日)。
生徒がそれぞれの民族の伝統衣装を着飾ってダンスを踊り、伝統料理を振る舞うお祭り。



サイエンスセミナー風景。エチオピアの理科隊員はお互いに協力して
各地でサイエンスセミナーやサイエンスショーを開催します。



生徒たちとの写真。人体模型を見せると「ルーシー！！」と言います。
(ルーシーは見つかっているほぼ人類最古の化石。エチオピアで発見されました。)